

原 著

中学生の生きがい感体験測定尺度の開発と妥当性

藤木五月 (倉敷教育センター)・井上祥治 (岡山大学教育学部)

本研究の目的は、中学生の生きがい感体験測定尺度の作成およびこの尺度の妥当性を検証することである。中学生の自由記述を基に32項目から成る生きがい感体験尺度を作成した。因子分析の結果からこの尺度は8因子から構成されていることが示された。この尺度の収束的および判別的妥当性についての因子的および外的な証拠も明らかにしている。

キーワード：生きがい感、生きがい感体験尺度、精神的健康

I. 研究の意義と目的

1. はじめに

近年、ライフスタイルや価値観の変化により、精神的健康のPositiveな側面が重視されるようになってきている。総理府広報室(1989)は、「今後の生活では心の豊かさに重きを置きたいか、物の豊かさに重きを置きたいか」の調査より、国民の価値観が昭和50年代前半より変化し始め、「物の豊かさ」以上に「心の豊かさ」を重要と考える人が増加したことを示している。同様の指摘は木下(1990)や近藤(1997)によってもなされており、心の豊かさ、つまりより良い心の状態は現代社会の誰もが目指す所であると言えるだろう。

また、近年、学校現場ではいじめや不登校だけでなく、無気力など表面化しづらい問題が生じている。これらが児童生徒の精神的健康と切っても切り離せない関係にあることは言うまでもなく、支援のあり方を模索することは急務であると考えられる。そこで本研究では、精神的健康のPositiveな側面として生きがい感に着目した研究を行い、今後、児童生徒の精神的健康への取り組みがなされる際の1指標となることを期待する。

2. 尺度の作成と信頼性・妥当性の検証

生きがい感は自我の確立する青年期より成立する概念である(近藤,1997)ことから、中学生を対象とした調査を行うことも十分に可能であると考えられる。しかし、これまでに中学生を対象とした研究はほとんど行われておらず、生きがい感の定義や研究も実証的な手段に基づいたものは少ない。

生きがい感の測定には人生の目的を測定する尺度であるPILが用いられることが多かった。その後、生きがい感尺度の作成が試みられた中で、近藤・鎌田(1998)の現代大学生の生きがい感スケールは、現在知り得る限りで最も実証性の高い手

法で作成された尺度である。この研究の特徴は、「どんな時に生きがいを感じるか」の問いに対する自由記述により生きがい感項目を収集し、尺度作成と定義づけを行った点である。この研究により、31項目の下位尺度として、存在価値、現状満足感、意欲、人生享楽の4つの下位尺度が抽出され、「現代大学生の生きがい感とは、自らの存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲を持つ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられることがある」との定義づけがなされた。中でも、「人生享楽」については従来の生きがい感定義にない説明概念であることから、自由記述式調査は時代に即した生きがい感研究を行う上で重要な役割を果たすと考えられる。

そこで本研究は、近藤・鎌田の手法に基づいて、現代中学生の生きがい感体験尺度を作成し、その信頼性および妥当性を合わせて検証することを第1の目的とする。

3. 精神的健康との関連

また、精神的健康のPositiveな側面の1つに位置づけられる生きがい感は、類似する概念のPositiveな側面およびNegativeな側面とも関連を持つと考えられる。そこで、3つの概念について生きがい感との関連を明らかにしたい。

1つ目は、健康である。山田ら(1996)は、健常成人がいきいきと元気に生活している時の状態を精神的健康度の一つの指標として、いきいき健康調査票を作成した。この尺度は、心理的活性が高い状態で精神的健康度が高いと考えられる精神状態のPositive Health(気分の安定性・気持ちの充実性・積極性)と心理的活性度が低い精神状態のNegative Health(不安・抑うつ・いらいら・心気性など)から構成されている。

2つ目は、気分である。Higgins(2001)は、自己規制原理を唱えている。これは、人が到達願望または防止願望に向かっ

進む時に、どの方向に注目して自己規制を行うかについての理論であり、主要な規制焦点として願望の達成または到達に目を向けて自己を規制していく促進焦点という方向と、防止するまたは避けることに目を向けて自己を規制していく防止焦点という方向が提唱されている。促進焦点は強い理想と関連し、防止焦点は強い義務と関連している。また、Higgins によると、促進焦点は「理想に到達・達成・近づくこと」または「距離が開くこと・落差が大きくなること」により元気・意気揚々・失望・落胆の感情軸に沿った感情が生じ、防止焦点は「ありたくないことが無いこと・避けたいことが避けられていること・責任を果たしていること・義務を果たしていることが実現しているまたは実現に近づくこと」または「ありたくないことがあること・避けたいことが避けられていないこと・責任を果たしていないこと・義務を果たしていないこと」によって、平静・リラックス感・平穏感・動揺感・緊張・不安・落ち着かないの感情軸に沿った感情が生じるとされている。

3つ目は自己概念である。Rosenberg (1965) は、自尊感情が高いということは人が自分自身を尊敬し価値ある人間であると考えていることを意味し、自尊感情が低いということは自己拒否・自己不満足・自己軽蔑を示しており、自分が観察している自己に対して尊敬を欠いていることを意味している(遠藤ら, 1992)。

以上の3つの概念のうち、山田らのPositive Health (気分の安定性・気持ちの充実性・積極性)、Higgins の元気・平静の気分、Rosenberg の自尊感情は、精神的健康のPositive な側面の1部分であり、また、山田らのNegative Health (不安・抑うつ・いらいら・心気性など)、Higgins の落胆・不安の気分は、精神的健康のNegative な側面の1部分であると捉えることができる。そこで本研究では、生きがい感と諸概念との関連から精神的健康の両側面との関連を検討し、構成概念妥当性の検証を行うことを第2の目的とする。

4. 生活態度との関連

さらに、中学生の生きがい感は、中学生の生活態度とも密接な関係を持つと考えられる。中学生の生活範囲の多くが学校、家庭、地域であり、その中で友人関係、家族関係、学業、趣味、自由などの関係や活動が展開されている。

内藤ら (1987) は、学校生活適応感尺度を作成し、学校生活への適応は学習意欲、教師関係、友人関係、規則への態度、進路意識、特別活動への態度から説明することができるとしている。古川ら (1993) は、この学校生活適応感尺度を含む学校への適応を測定する尺度・項目の中に、生きがい感あるいはその一部を測定していると思われる項目が含まれていることを指摘している。

また、森下 (1981) は、家族関係の1側面である子どもの

親に対する親和性は、親との情緒的結びつき、親のようになりたい程度、親を頼りになると思う程度から説明することができるとしているが、これまでに生きがい感と親子関係との関連については明らかにされていない。

そこで本研究では、生きがい感と学校生活適応および親子関係に関する生活態度との関連を明らかにすることを第3の目的とする。

5. 生きがい感の定義

さらに、上述の検討を踏まえ、現代中学生の生きがい感とはどのようなものであるかを明らかにすることを第4の目的とする。

II. 予備調査

1. 目的

中学生を対象とした自由記述調査により、従来の研究における定義に限定されることなく、現代中学生の実態に即した生きがい感体験の収集・分類を行い、尺度構成項目となる項目の選定を行う。

2. 方法

[調査対象]

県内の公立中学校の生徒479名(男子244名、女子235名)を調査対象とした。

[調査時期]

2004年12月中旬。

[調査方法]

無記名一斉方式の質問紙法を実施した。

[調査項目]

調査項目は以下のとおりである。

- ①自身についての記述：学年・性別への回答を求めた。
- ②生きがい感体験の自由記述：「あなたが生きがいを感じるのはどんな時ですか？」という設問形式で複数回答を求めた。なお、質問紙は、設問のみのAタイプと「生きがいとは生きていてよかったと思えるようなこと・生きていく上で大切だと感じられるようなこと」との説明を付加したBタイプの2種を実施した(A204名、B275名)。

3. 結果と考察

[記述のカテゴリ分類]

自由記述により得られた1230の記述(A505、B725)を、3名の研究者により11のメインカテゴリおよび56のサブカテゴリに分類した。質問紙のタイプによる回答の違いは大きく現れなかった。次に、各サブカテゴリより選択した記述に若干の言葉遣いの修正を加え、92項目を選定した(Table1)。

Table1 カテゴリ分類表と92項目

カテゴリ	項目	カテゴリ	項目
《積極的な個人的活動》		《意欲》	
テレビ	好きなテレビ番組を見ている時	上達・達成①	今までできなかった事ができるようになった時
芸能人	好きな芸能人を見ている時	上達・達成②	試合や大会で成績がよかった時
映画	映画を見ている時	上達・達成③	テストの成績がよかった時
ゲーム	テレビゲームをしている時	上達・達成④	仲間と協力して目的を達成できた時
パソコン	パソコンを使っている時	上達・達成⑤	何かを最後までやり終えた時
本①	雑誌を読んでいる時	上達・達成⑥	目標を達成できた時
本②	好きな本を読んでいる時	挑戦・熱中①	何かに挑戦している時
本③	マンガを読んでいる時	挑戦・熱中②	何かに夢中になっている時
運動	好きなスポーツをしている時	挑戦・熱中③	何かを一生懸命がんばっている時
音楽①	歌ったり楽器を演奏したりしている時	満足	結果に満足できた時
音楽②	音楽を聞いている時	将来・未来①	将来の事を考えている時
創作①	絵や文を描いている時	将来・未来②	未来に向かって努力している時
創作②	何かを作っている時	《ポジティブな状態》	
料理	料理をしている時	楽しい・うれしい①	うれしい事や楽しい事がある時
おしゃれ	おしゃれをしている時	楽しい・うれしい②	心がウキウキしている時
金銭・買い物①	お金がたくさんある時	幸せ・喜び①	いい事がある時
金銭・買い物②	おこづかいやプレゼントをもらった時	幸せ・喜び②	幸せを感じた時
金銭・買い物③	買い物をしている時	笑顔	笑っている時
金銭・買い物④	欲しかった物をやっと手に入れた時	《ネガティブな状態》	
釣り	釣りをしている時	つらい・やばい	つらい事や悩む事がある時
趣味	趣味に没頭している時	苦しみ・痛み	痛みや危険を感じた時
好きな事	好きなことが出来る時	《自己の存在》	
遊び	遊んでいる時	自分らしさ①	自分が自分らしくいられる時
《積極的な社会的活動》		自分らしさ②	自分の気持ちを表現できた時
部活動①	仲間と一緒に部活動をしている時	健康	健康で元気な時
部活動②	部活動をしている時	成長	背が伸びた時
勉強	勉強している時	存在①	今を一生懸命生きている時
役割①	学校行事に取り組んでいる時	存在②	毎日ふつうの生活をしている時
役割②	任された仕事をしている時	《他者の存在》	
《消極的な活動》		友達①	友達と一緒に過ごしている時
自由	自由な時間がある時	友達②	友達や仲間という存在がいる事
家	家にいる時	好きな人①	好きな人と一緒に過ごしている時
休み①	休み時間	好きな人②	人を好きになった時
休み②	休日や週末	家族①	家族という存在がいる事
のんびり①	のんびりしている時	家族②	家族と一緒に過ごしている時
のんびり②	ポ一つしたりごろごろしたりしている時	ペット	ペットや動物と一緒に過ごしている時
一人	ひとりである時	他者①	いろいろな人に出会えた時
《日常生活》		他者②	誰かと楽しく話している時
食事①	おなかがいっぱいになった時	他者③	誰かの笑顔を見た時
食事②	おいしい物や好きな物を食べている時	《他者との関わり》	
入浴	お風呂に入っている時	他者への援助①	人や社会のために何かをしている時
睡眠	ゆっくり寝られる時	他者への援助②	人を思う気持ちを持つ事
呼吸	息をしている時	他者からの感謝	人から感謝されたり喜ばれたりした時
起床	目が覚めた時	他者からの評価①	いい事をしてほめられた時
《非日常生活》		他者からの評価②	努力したことが認められた時
感動体験①	きれいな風景やめずらしい物に出会った時	他者からの信頼①	頼りにされていると感じた時
感動体験②	自然の美しさを感じられた時	他者からの信頼②	誰かに必要とされた時
感動体験③	テレビや本で大切な事を学んだ時	他者からの援助①	困っているときみんなが助けてくれた時
感動体験④	何かに感動した時	他者からの援助②	自分が大切にされていると感じた時
感動体験⑤	旅行に行った時		
イベント①	季節のいろいろな行事		
イベント②	誕生日にお祝いしてもらった時		

Ⅲ. 尺度構成項目の選定

1. 目的

予備調査の結果選定した項目が、特定の人だけの特殊な生きがい感体験なのか、現代中学生一般に適用できる生きがい感体験なのかを確認するための調査を行い、尺度構成項目の選定を行う。

2. 方法

[調査対象]

県内の公立中学校の生徒 185 名(男子 94 名、女子 91 名)を調査対象とした。なお、各分析には記入ミスのある回答を除いたものを用いた。

[調査時期]

2005 年 7 月中旬。

[調査方法]

無記名一斉方式の質問紙法を実施した。

[調査項目]

調査項目は以下のとおりである。

- ①自身についての記述：学年・性別への回答を求めた。
- ②生きがい感体験項目：92 項目について 3 件法による回答を求めた。

3. 結果と考察

[92 項目の項目分析]

92 項目に対して項目得点合計および度数分布傾向による項目分析を行った。項目得点合計については、項目ごとの合計点を算出し、基準値 370 点(2 点×185 名)に満たない項目を削除対象とした。また、度数分布傾向については、項目ごとに各得点(1~3 点)の回答比率を算出し、得点の増加と一致しない項目を削除対象とした。これにより 26 項目を削除し、66 項目が選定された。

[66 項目の因子分析]

66 項目に対して最尤法による分析を行った。固有値の変化は、24.68、3.49、2.22、2.06、1.76、1.67…というものであった。因子構造を比較し、各因子の特徴を最も説明できる 5 因子解を選択した。そこで再度 5 因子を仮定して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量 0.4 未満を示した 17 項目を分析から削除し、49 項目に対して、因子数を 5 因子に設定し、再度最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。なお、回転前の 5 因子で 49 項目の全分散を説明する割合は 55.52%であった。

第 1 因子は「テレビや本で大切な事を学んだ時」「自然の美しさを感じられた時」など自然や他者とのつながりに対する主体性を示す項目が高い負荷量を示していた

ことから、主体的活動因子と命名した。第 2 因子は「お金がたくさんある時」「おいしい物や好きな物を食べている時」など日常生活での満足感を示す項目が高い負荷量を示していたことから、生活満足因子と命名した。第 3 因子は「誰かに必要とされた時」「自分が大切にされていると感じた時」など他者からの受容や意欲的な行動を示す項目が高い負荷量を示していたことから、存在価値因子と命名した。第 4 因子は「家族と一緒に過ごしている時」「家族という存在がいる事」など家族や友人の存在に関する項目が高い負荷量を示していたことから、重要な他者の存在因子と命名した。第 5 因子は「仲間と一緒に部活動をしている時」「部活動をしている時」など部活動についての項目が高い負荷量を示していたことから、部活動因子と命名した。

以上の 5 因子 49 項目を尺度構成項目とするために、原文に忠実に質問形式に変換した。

Ⅳ. 尺度の信頼性・妥当性の検討および諸概念との関連

1. 目的

選定した生きがい感体験項目を用いた調査を行い、現代中学生の生きがい感体験尺度を作成する。また、 α 係数による内的整合性の検討とセルフアンカリングスケールによる基準関連妥当性の検討を行い、尺度の信頼性と妥当性の検証を行う。さらに、精神的健康の諸概念との関連から尺度の構成概念妥当性の検討を行うとともに、生活態度との関連を検討する。

2. 方法

[調査対象]

県内の公立中学校の生徒 501 名(男子 253 名、女子 241 名、不明 7 名)を調査対象とした。なお、各分析には記入ミスのある回答を除いたものを用いた。

[調査時期]

2005 年 11 月上旬。

[調査方法]

無記名一斉方式の質問紙法を実施した。

[調査項目]

調査項目は以下のとおりである。

- ①自身についての記述：学年・性別への回答を求めた。
- ②生きがい感体験項目：49 項目について 5 件法による回答を求めた。
- ③セルフアンカリングスケール：普段の生活で感じる生きがい感の程度について 0 点~10 点で回答を求めた。
- ④いきいき健康調査票 ver. 2(山田ら, 1996)：Positive

Health (以下 PH) を測定する 14 項目 3 下位尺度と Negative Health (以下 NH) を測定する 7 項目の合計 21 項目について 4 件法による回答を求めた。

⑤気分についての項目: Higgins(2001)の自己規制原理に基づいて、元気、落胆、平静、不安の気分を表す 8 項目を設定し、7 件法による回答を求めた。

⑥自尊感情尺度(Rosenberg, 1965): 10 項目について 4 件法による回答を求めた。

⑦学校生活適応感尺度(内藤ら, 1987): 学習意欲や教師関係など 6 領域 36 項目より中学生にふさわしいと考えられる 18 項目を用い、5 件法による回答を求めた。

⑧子どもの親に対する親和性尺度(森下, 1981): 親密さ・同一視欲求・信頼性の 3 下位尺度 17 項目より中学生にふさわしいと考えられる 9 項目を用い、3 件法による回答を求めた。

3. 結果と考察

[49 項目の因子分析]

49 項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の変化は、12.46、2.80、2.52、1.86、1.74、1.50、1.32、1.29、1.21、…というものであった。因子構造を比較し、各因子の特徴を最も説明できる 8 因子解を選択した。そこで再度 8 因子を仮定して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が 0.4 未満を示した 17 項目を分析から削除し、32 項目に対して再度最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンおよび因子相関行列を Table2,3 に示す。なお、回転前の 8 因子で 32 項目の全分散を説明する割合は 60.07%であった。

第 1 因子は「楽しく話ができる相手があります」「よく笑っています」など他者とのフレンドリーな関係を示す項目が高い負荷量を示していたことから、友好的関係因子と命名した。第 2 因子は「誰かに必要とされています」「頼りにされていると感じています」など自己の存在や結果を他者から認められる内容の項目が高い負荷量を示していたことから、他者からの受容因子と命名した。第 3 因子は「挑戦している事があります」「夢中になっている事があります」など自己の意欲を示す項目が高い負荷量を示していた。また、ここでの意欲は結果の良し悪しや他者からの受容など外部基準によるものではなく、自己の内発的な意欲であることから、内発的意欲と命名した。第 4 因子は「仲間と一緒に部活動をしています」「部活動に参加しています」の 2 項目で構成されていることから、部活動因子と命名した。第 5 因子は「お金がたくさんあります」「欲しいと思っていた物を手に入れ

ることができています」など金銭やプレゼントなどの獲得を示す項目が高い負荷量を示していたことから、物質的獲得因子と命名した。第 6 因子は「自然の美しさを感じることがよくあります」「きれいな風景やめずらしい物によく出会っています」など自然や作品への感動を示す項目が高い負荷量を示していたことから、感動体験因子と命名した。第 7 因子は「自由な時間がたくさんあります」「のんびりと過ごしています」など自己のペースで気ままに生活する内容の項目が高い負荷量を示していたことから、自由な時間因子と命名した。第 8 因子は「家族という存在が身近にいます」「よく家族と一緒に過ごしています」の 2 項目で構成されていることから、家庭生活因子と命名した。

Table2 32項目の因子分析結果(Promax回転後の因子パターン)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8
楽しく話ができる相手があります。	0.81	-0.06	-0.09	-0.07	0.01	-0.02	-0.04	0.00
よく笑っています。	0.78	-0.02	0.08	0.02	0.00	-0.04	-0.10	0.04
休み時間を楽しく過ごしています。	0.69	0.04	-0.06	0.00	0.01	0.01	0.12	-0.11
よく誰かの笑顔を見ることがあります。	0.66	0.01	-0.02	-0.07	-0.16	0.24	-0.14	0.08
よく友達と一緒に過ごしています。	0.55	-0.05	0.18	0.01	0.02	-0.06	0.21	-0.05
困っている時にみんなが助けてくれます。	0.42	0.27	-0.12	0.09	0.06	0.04	0.02	0.07
誰かに必要とされています。	-0.14	1.04	0.02	0.03	-0.13	-0.04	0.11	-0.03
頼りにされていると感じています。	0.06	0.80	0.04	-0.02	0.12	-0.13	-0.06	-0.10
努力した事が認められていると感じています。	0.00	0.57	0.04	-0.03	0.03	0.02	-0.03	0.01
自分は大切にされていると感じています。	0.06	0.49	-0.08	-0.04	0.06	-0.01	0.03	0.29
人から感謝されたり喜ばれたりしています。	0.14	0.43	0.03	0.02	0.08	0.17	0.00	-0.04
挑戦している事があります。	-0.18	0.04	0.91	0.03	-0.05	0.03	0.00	-0.02
夢中になっている事があります。	0.10	-0.04	0.54	0.03	-0.03	-0.01	0.09	0.00
一生懸命がんばっている事があります。	0.19	0.07	0.45	0.05	0.04	-0.05	-0.13	0.04
未来に向かって努力しています。	0.06	0.12	0.44	-0.09	0.10	0.15	-0.13	-0.01
最後までやり終えた事があります。	0.15	-0.01	0.38	0.02	-0.01	0.08	0.01	0.07
仲間と一緒に部活動をしています。	-0.03	-0.04	0.02	0.97	0.02	0.03	-0.01	0.03
部活動に参加しています。	-0.02	0.03	0.03	0.87	-0.02	-0.01	-0.04	0.00
お金がたくさんあります。	0.04	-0.07	-0.05	0.01	0.70	0.06	-0.10	0.01
欲しいと思っていた物を手に入れることができます。	0.00	-0.03	-0.04	-0.01	0.69	-0.06	0.02	0.10
おごつかいやプレゼントをもらうことができます。	0.09	0.13	-0.03	0.05	0.49	0.02	0.02	-0.09
よく旅行に出かけます。	-0.20	0.07	0.11	-0.04	0.44	0.07	0.04	0.02
自然の美しさを感じることがよくあります。	-0.02	0.07	-0.05	0.03	-0.06	0.68	-0.06	-0.01
きれいな風景やめずらしい物によく出会っています。	-0.02	-0.03	0.12	-0.04	0.10	0.54	0.09	0.00
テレビや本から大切な事を学ぶことができます。	0.05	-0.07	0.08	0.03	0.00	0.48	0.09	0.05
好きな本を読むことができます。	0.04	-0.14	0.03	-0.01	0.07	0.46	0.16	-0.10
自由な時間がたくさんあります。	-0.11	0.01	0.06	-0.13	0.05	-0.02	0.63	0.09
のんびりと過ごしています。	0.03	0.04	-0.12	0.06	-0.09	0.20	0.59	-0.02
たくさん遊んでいます。	0.37	-0.05	0.08	0.04	0.02	-0.20	0.48	-0.04
ゆっくりと寝る時間があります。	-0.04	0.12	-0.05	0.00	-0.04	0.23	0.41	0.08
家族という存在が身近にいます。	0.06	-0.01	0.09	-0.01	-0.09	-0.10	0.02	0.91
よく家族と一緒に過ごしています。	-0.10	-0.05	-0.08	0.06	0.18	0.06	0.06	0.61

Table3 32項目因子相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	—	0.53	0.54	0.28	0.34	0.37	0.33	0.47
2	0.53	—	0.52	0.18	0.56	0.55	0.05	0.52
3	0.54	0.52	—	0.25	0.41	0.44	0.12	0.29
4	0.28	0.18	0.25	—	0.12	0.00	-0.08	0.12
5	0.34	0.56	0.41	0.12	—	0.44	0.18	0.35
6	0.37	0.55	0.44	0.00	0.44	—	0.12	0.41
7	0.33	0.05	0.12	-0.08	0.18	0.12	—	0.16
8	0.47	0.52	0.29	0.12	0.35	0.41	0.16	—

[下位尺度間の関連]

32 項目の下位尺度を構成する項目の平均値と SD、 α 係数を算出し(Table4)、平均値を下位尺度得点とした。友好的関係は最も高い下位尺度得点を示したことから、現代中学生にとって最も身近な生きがい感であると言えるだろう。また、内的整合性は友好的関係、他者からの受容、内発的意欲、部活動については十分高い値が得られた。物質的獲得、感動体験、自由な時間、家庭生活については項目の追加や再調査によって内的整合性がさらに高められることが望ましいと考えられる。

続いて、下位尺度間相関を算出した(Table5)。-0.07～0.53の比較的穏やかな相関値が示されたことから、本尺度は幅広い概念を含んでいると言えるだろう。また、他者からの受容と内発的意欲、友好的関係と他者からの受容および内発的意欲の間にはいずれも高い相関が認められた。部活動は他の下位尺度との相関が低く、自由な時間、感動体験とは有意な相関を示さなかったが、これについては中学生の多くが部活動に所属しているため、2項目では弁別性に欠ける可能性が考えられる。

Table4 32項目下位尺度の基本統計量とα係数

	平均値	SD	α係数
友好	4.15	0.70	0.83
他者	3.18	0.78	0.82
内発	3.72	0.77	0.76
部活	3.87	1.44	0.91
物質	2.81	0.80	0.67
感動	3.58	0.77	0.65
自由	3.58	0.81	0.65
家庭	3.80	0.94	0.69

Table5 32項目の下位尺度間相関

	友好	他者	内発	部活	物質	感動	自由	家庭
友好	-	0.52 **	0.52 **	0.22 **	0.27 **	0.34 **	0.38 **	0.39 **
他者	0.52 **	-	0.53 **	0.14 **	0.46 **	0.39 **	0.19 **	0.19 **
内発	0.52 **	0.53 **	-	0.23 **	0.33 **	0.41 **	0.18 **	0.27 **
部活	0.22 **	0.14 **	0.23 **	-	0.10 *	0.00	-0.07	0.11 *
物質	0.27 **	0.46 **	0.33 **	0.10 *	-	0.33 **	0.15 **	0.27 **
感動	0.34 **	0.39 **	0.41 **	0.00	0.33 **	-	0.24 **	0.26 **
自由	0.38 **	0.19 **	0.18 **	-0.07	0.15 **	0.24 **	-	0.25 **
家庭	0.39 **	0.19 **	0.27 **	0.11 *	0.27 **	0.26 **	0.25 **	-

*p<0.05, **p<0.01

[セルフアンカリングスケールとの関連]

近藤・鎌田(1998)の生きがい感尺度は、発達段階が大きく異なるため、本研究の外部基準として用いることはできない。そこで、セルフアンカリングスケールを基準関連妥当性の検証に用いることにした。

生きがい感体験とセルフアンカリングスケールとの相関をTable6に示す。32項目合計得点とセルフアンカリングスケールとの相関は0.58の値を示したことから、合計得点によって現代中学生の生きがい感体験をかなりの程度測定することが可能であると考えられる。また各下位尺度は、友好的関係、他者からの受容、内発的意欲、家庭生活、自由な時間および物質的獲得、感動体験、部活動の順位で有意な正の相関を示しており、8つの下位尺度によってセルフアンカリングスケールだけでは計り知れない生きがい感体験を測定できていると言えるだろう。

Table6 セルフアンカリングスケールとの相関

	32項目合計	友好	他者	内発	部活	物質	感動	自由	家庭
セルフアンカリング	0.58 **	0.54 **	0.52 **	0.48 **	0.18 **	0.23 **	0.21 **	0.25 **	0.39 **

*p<0.05, **p<0.01

[精神的健康との関連]

3つの概念を用いて、生きがい感と精神的健康の両側面との関連を検討し、構成概念妥当性の検証を行った。いきいき健康調査票(山田ら, 1996)の項目については、山田らの分類に基づいて4つの下位尺度に分類し、平均を下位尺度得点とした。気分についての8項目について

は、まず因子分析を行った。その結果、抽出された4因子をHigginsの理論に従い命名し、それぞれの合計を下位尺度得点とした。自尊感情尺度については、逆転項目の修正を行い、合計を自尊感情得点とした。

生きがい感体験と3つの概念との相関はTable7に示すとおりである。32項目合計と精神的健康のPositiveな側面であるPH、元気気分、平静気分、自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。また下位尺度ごとでは、部活動を除く7つの下位尺度とPositiveな側面との間に有意な正の相関が認められた。部活動については、一部で有意な相関が示されなかったが、これについては前述の弁別性の問題が関係していると考えられる。一方、32項目合計と精神的健康のNegativeな側面である落胆気分との間に有意な負の相関が認められ、NH、不安気分との間に有意ではないが負の相関が示された。また下位尺度ごとでは、感動体験をのぞく7つの下位尺度とNegativeな側面との間に負の相関が示された。一方、感動体験については、NH、不安気分との間に有意な正の相関が認められ、落胆気分との間に有意ではないが正の相関が示された。このことから、感動体験下位尺度の特殊性が伺える。

さらに、3つの概念との関連を詳しく見ていくと、32項目合計はいきいき健康調査票のPHの気分の安定性に比べて気持ちの充実性や積極性との間により高い相関を示した。このことから、生きがい感体験はより積極的であることと関連があると考えられる。

また、32項目合計は気分項目の元気-落胆の軸との関連がより強いことから、生きがい感体験は、理想の達成という観点である促進焦点と強く関連していると考えられる。また、下位尺度ごとでは、友好的関係、他者からの受容、内発的意欲、部活動、物質的獲得、家庭生活は元気-落胆の軸との関連が強く、促進焦点との関連が示されたが、感動体験については平静-不安の軸との関連がわずかに強く、義務の達成という観点である防止焦点との関連が示された。このことから、生きがい感体験を得るほど、なりたいたい自分に近づくことができるが、ほっとする一時(感動体験)を得ることによって日々の義務感から開放されることもできると考えられる。

さらに、32項目合計および各下位尺度は自尊感情との間に有意な正の相関が示された。このことから、生きがい感体験を得るほど自己を尊敬し、価値ある人間だと感じることができると考えられる。

Table7 精神的健康諸概念との相関

	32項目合計	友好	他者	内発	部活	物質	感動	自由	家庭
PH(気分の安定性)	0.38 **	0.31 **	0.28 **	0.31 **	0.03	0.19 **	0.17 **	0.31 **	0.24 *
PH(気持ちの充実性)	0.64 **	0.46 **	0.60 **	0.50 **	0.09 *	0.35 **	0.34 **	0.33 **	0.35 **
PH(積極性)	0.49 **	0.40 **	0.43 **	0.51 **	0.04	0.16 **	0.43 **	0.18 **	0.20 *
NH	-0.04	-0.07	-0.05	-0.02	-0.03	-0.01	0.16 **	-0.12 **	-0.08
元気気分	0.56 **	0.60 **	0.44 **	0.41 **	0.17 **	0.21 **	0.27 **	0.30 **	0.29 *
平静気分	0.41 **	0.31 **	0.41 **	0.33 **	0.03	0.13 **	0.33 **	0.30 **	0.17 *
落胆気分	-0.22 **	-0.28 **	-0.20 **	-0.16 **	-0.13 **	-0.11 **	0.06	-0.17 **	-0.09
不安気分	-0.05	-0.11 **	-0.03	-0.03	-0.04	-0.01	0.13 **	-0.13 **	-0.02
自尊感情	0.44 **	0.29 **	0.53 **	0.41 **	0.10 *	0.28 **	0.15 **	0.15 **	0.20 **

*p<.05. **p<.01

[生活態度との関連]

2つの概念を用いて、生きがい感と生活態度との関連を検討した。学校生活適応感尺度(内藤ら, 1987)の18項目については、内藤らの分類に基づいて6つの下位尺度に分類し、合計を下位尺度得点とした。子どもの親に対する親和性尺度(森下, 1981)の9項目については、逆転項目の修正を行い、森下の分類に基づいて3つの下位尺度に分類し、合計を下位尺度得点とした。

生きがい感と2つの概念との相関はTable8に示すとおりである。32項目合計と学校生活適応感下位尺度との間にいずれも有意な正の相関が認められた。特に、友人関係、特別活動への態度との間に高い相関を示したことから、学校生活の中での生きがい感は友人関係や部活動と強く関連していると考えられる。また、ほとんどの下位尺度と学校生活適応感下位尺度との間に有意な正の相関が認められ、中でも友好的関係と友人関係、他者からの受容と友人関係、内発的意欲と進路意識および友人関係、部活動と特別活動への態度との間に高い相関が示されたことから、生きがい感の一部と学校生活への適応が強く関連していることが示されたと考えられる。

続いて、32項目合計と親和性下位尺度との間にも、いずれも有意な正の相関が認められた。また、ほとんどの下位尺度と親和性下位尺度との間に有意な正の相関が認められ、中でも他者からの受容と親密さ、家庭生活と親密さおよび同一視欲求および信頼性との間に高い相関が認められたことから、生きがい感の一部と親に対する親和性が強く関連していることが示されたと考えられる。

Table8 生活態度諸概念との相関

	32項目合計	友好	他者	内発	部活	物質	感動	自由	家庭
学習意欲	0.38 **	0.22 **	0.45 **	0.39 **	0.11 *	0.28 **	0.26 **	0.00	0.16 **
教師関係	0.46 **	0.39 **	0.43 **	0.30 **	0.14 *	0.14 **	0.29 **	0.18 **	0.31 **
友人関係	0.65 **	0.75 **	0.50 **	0.51 **	0.25 **	0.22 **	0.23 **	0.29 **	0.33 **
親和性の態度	0.36 **	0.30 **	0.33 **	0.23 **	0.13 **	0.11 *	0.24 **	0.17 **	0.25 **
進路意識	0.48 **	0.35 **	0.38 **	0.53 **	0.10 *	0.19 **	0.31 **	0.12 **	0.23 **
特別活動への態度	0.57 **	0.48 **	0.42 **	0.48 **	0.56 **	0.18 **	0.24 **	0.12 **	0.24 **
親密さ	0.48 **	0.42 **	0.48 **	0.24 **	0.14 **	0.20 **	0.22 **	0.23 **	0.53 **
同一視欲求	0.41 **	0.31 **	0.36 **	0.19 **	0.13 **	0.22 **	0.24 **	0.16 **	0.43 **
信頼性	0.34 **	0.31 **	0.32 **	0.15 **	0.10 *	0.08	0.14 **	0.20 **	0.48 **

*p<.05. **p<.01

[感動体験下位尺度]

各下位尺度が精神的健康のNegativeな側面と負の相関あるいは有意な負の相関を示す一方、感動体験はNHとの間に有意な正の相関、落胆気分との間に正の相関、不安気分との間に有意な正の相関を示しており、特殊な生きがい感であると考えられる。

まず、感動体験下位尺度の特性を明らかにするためにGP分析を行った(Table9)。セルフアンカリングスケールおよび精神的健康のPositiveな側面については上位群が下位群より有意に高い得点を示した。また、落胆気分を除く精神的健康のNegativeな側面についても上位群が下位群より有意に高い得点を示しており、落胆気分についても有意ではないが上位群が下位群より高い得点を示した。

続いて、感動体験を構成する項目と気分項目との関連により、項目の特性を検討する(Table10)。4項目とも、元気-落胆の軸だけでなく、平静-不安の軸との関連も強いことから、理想への達成という観点である促進焦点だけでなく、義務の達成という観点である防止焦点とも強く関連していると考えられる。

以上の検討より、感動体験はPositiveな側面だけでなくNegativeな側面とも強い関連を持つ特殊な生きがい感であり、この下位尺度の持つ自然や作品への感動といった心の豊かさの側面がPositiveな側面と関連し、現実から一時的に解放された安堵感の側面がNegativeな側面と関連していると考えられる。本研究ではここまで感動体験としてきたが、この尺度の持つ2つの特性を考慮して忘我体験とすることが望ましいかもしれない。

Table9 感動体験GP分析の結果

	上位25%群		下位25%群		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
セルフアンカリング	7.20	2.19	6.01	2.52	3.80 **
PH(気分の安定性)	2.67	0.72	2.43	0.70	2.55 *
PH(気持ちの充実性)	2.67	0.57	2.25	0.62	5.36 **
PH(積極性)	3.04	0.48	2.53	0.55	7.57 **
NH	2.61	0.65	2.60	0.59	2.59 *
元気気分	11.82	2.08	10.54	2.66	4.09 **
平静気分	9.73	2.38	7.59	2.78	6.33 **
落胆気分	7.64	2.92	6.98	3.03	1.69
不安気分	8.69	3.21	7.70	2.82	2.55 *
自尊感情	24.64	5.04	23.13	5.27	2.22 *

Table10 感動体験項目と気分項目との相関

	元気気分	平静気分	落胆気分	不安気分
自然の美しさを感じることがよくあります。	0.17 **	0.25 **	0.07	0.13 **
きれいな風景やめずらしい物によく出会っています	0.26 **	0.31 **	0.04	0.07
テレビや本から大切な事を学ぶことがよくあります。	0.22 **	0.18 **	0.04	0.06
好きな本を読むことがよくあります。	0.11 *	0.20 **	0.02	0.07

*n<.05 **n<.01

V. 総合考察

本研究は、実証的な調査に基づいて、現代中学生の実態に即した生きがい感尺度の作成および精神的健康や現代中学生の生活態度との関連を明らかにすることを旨とした。その結果、8つの下位尺度を持つ32項目の尺度を作成することができた。「生きがい感とは何であるか」の自由記述によって得られた項目を質問項目に反映させたため、表面的妥当性および内容的妥当性が高く、因子的妥当性もある尺度が作成されたとと言えるだろう。しかし、下位尺度の中には、構成項目の少ないものや内的整合性があまり高くないものがある。今後は、信頼性および妥当性をさらに高めるために、部活動や家庭生活についての項目を新たに追加し、因子

構造を検討する必要があるだろう。また、今回の調査は県内の特定の地域において行われたものであるため、地域差など何らかの特性の異なる中学生においても同様の因子が抽出されるのか、同様の妥当性が確認されるのかどうかと言った点についても、さらなる検討が必要とされるだろう。

精神的健康の両側面との関連については、本尺度と精神的健康の Positive な側面との関連が多く認められ、Positive な側面との構成概念妥当性の高さが示された。よって、生きがい感は積極性や活発さが伴い、自信を得ることが出来るものであると考えられる。また、下位尺度の中には、Negative な側面とも関連のある感動体験(忘我体験)が含まれていることも示され、気分の安定を得ることが出来るものであると考えられる。

生活態度との関連については、本尺度と学校生活および親子関係との関連が多く認められた。今後はさらに、学校や家庭のどのような側面が生きがい感に影響する背景要因であるかを追及することが望まれる。

最後に、本尺度の特性に基づき、現代中学生の生きがい感は以下のような体験の中で獲得されるものであると定義する。

- ①他者とのフレンドリーな関係
- ②自己の存在や努力の結果を他者から認められる体験
- ③目標に向かって意欲的に取り組む体験
- ④部活動
- ⑤物質的に豊かな生活
- ⑥自然や作品への感動(現実からの解放)
- ⑦自由で気ままな生活
- ⑧家庭生活

①～③については、これまでの生きがい感研究や定義との共通点が認められる。④と⑧については、中学生に特有の生きがい感が見出されたと考えられる。一方、⑤～⑦については従来の定義にはあまり見られない内容の生きがい感である。特に、⑤と⑦については、近藤(1998)の大学生の生きがい感における人生享樂と共通するのではないだろうか。また、⑥については、感動を得るという積極的な意味での生きがい感から、心を休めるという消極的な意味での生きがい感までを含んでいる。いずれも、忙しい現代社会を生きる上で必要不可欠な体験であり、現代に特有の生きがい感であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編) セルフ・エスティ

ームの心理学—自己価値の探求— ナカニシヤ出版 1992

- 2) Higgins, E.T. Promotion and Prevention Experiences : Relating Emotions to Nonemotional Motivational States. In Forgas, J.P.(Ed.) *Handbook of Affect and Social Cognition*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. 2001
- 3) 加藤礼子 成人女性の生きがい感に関する要因について(2)—年齢・職業形態および夫婦間における役割意識の差の検討— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集 2003
- 4) 神谷美恵子 生きがいについて みすず書房 1980
- 5) 木下富雄 健康心理学の現況 心理学評第33巻(1), 3-34 1990
- 6) 熊野道子 人生観のプロファイリングによる生きがいの2次元モデル 健康心理学研究第16巻(2), 68-76 2003
- 7) 古川雅文・大江幸銅・内藤勇次・浅川潔司 学校における児童の生きがい感尺度の構成 兵庫教育大学研究紀要第13巻, 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育, 103-114 1993
- 8) 近藤勉 生甲斐への一考察 発達人間学研究第6巻, 11-20 1997
- 9) 近藤勉・鎌田次郎 現代大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究第11巻(1), 73-82 1998
- 10) 森下正康 児童の親に対する親和性の因子構造と尺度の作成 和歌山心理研究会(藤田紹憲先生退官記念誌), 57-72 1981
- 11) 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145 1987
- 12) 岡堂哲雄 生きがい—PILテストつき— 河出書房新社 1993
- 13) Rosenberg, M. *Society and adolescent self image*. Princeton: Princeton University Press. 1965
- 14) 総務庁青少年対策本部 青少年の意識の変化に関する基礎的研究「青少年の連帯感などに関する調査」第1回～第5回の総括 1995
- 15) 総理府広報室 国民生活に関する世論調査 月間世論調査, 21(12), 43-69 1989
- 16) 山田裕章・峰松修・冷川昭子 正常者と精神障害者の「いきいき度」の比較—「いきいき調査票」ver.1の改訂— 健康心理学研究第9巻(1), 21-33 1999
- 17) 山幡信子 —老年期における環境の影響— 日本心理学会第55回発表論文集 492 1991

Title : Development and Validation of a Scale for Measuring Meaningful Life Experiences of Junior High School Students

Satsuki FUJIKI (Kurasiki Education Center)

Shoji INOUE (Okayama University)

The purpose of this study is to develop a scale for measuring meaningful life experiences of junior high school students and examine validity of this scale. We developed a meaningful life experiences scale formed of 32 items on the basis of descriptions by junior high school students. Factor analysis revealed that this scale has 8 factors. Factorial and external evidence of convergent and discriminant validity for the scale are also presented.

Keywords : Meaningful Life Experience, a Scale for Measuring Meaningful Life Experiences, Mental Health.
